

安倍頼時は黒竜江を遡ったか？

高橋公明

1. 胡国というところ

『今昔物語集』の巻31の第11話に「陸奥国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返る語」と題する話があるⁱ。その概略は以下のごとくである。

陸奥国の安倍頼時は夷と心を合わせて朝廷に謀反を企てていると疑われた。陸奥守源頼義の追討から逃れるため、一族・郎党・下人合わせて50人ほどで船に乗り、北に向かった。海を渡り、陸地を見ても断崖ばかりで上陸するところもなく、しばらく行くと、大河があった。河口から何日も上がっていったが、人を見なかった。突然、大きな音が遠くから響いてきたので、船を葦原に隠し、様子を窺った。故国の人を絵に描いたように、頭に赤いものを結った人が馬に乗って現れた。次から次へ千騎ほど現れ、理解できない言葉をしゃべりながら、馬に乗ったままどどん川を渡る。後で調べてみると、そこは浅瀬ではなく、水深は深かった。馬の筏という方法をとったのである。皆は恐ろしくなり、逃げ帰った。しばらくして頼時は死んだ。頼時の子宗任法師は筑紫でそのときの体験を語り、胡国という所は唐よりも遙に北にあると聞いていたが、「陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ差合タルニヤ有ラム」と語った。

この話は安倍頼時の北方への逃避行とそこからの帰還の話である。ここで語られている北方への逃避行は、前九年の役の政治過程が反映している。また、この戦争で頼時の子の宗任法師は史実においても筑紫に流されており、これも戦後処理の過程が反映している。いずれにせよ、荒唐無稽な話ではない。ここで検討するのは、このテキストのなかで、頼時一行は北方のどこに行ったのかということである。言い換えれば、このテキストのなかでの大河とはどこなのかということである。そして、この小文の題目が表わしているように、筆者は黒竜江であった可能性を検討しようとしているのであるⁱⁱ。

ところで、この話は『宇治拾遺物語』巻15-2にも「頼時ガ胡人見タル事」と題して収められているⁱⁱⁱ。細部の表現は、やや簡略になっているが、基本的に同じ筋立てである。差異がある場合、必要に応じて参照する。また、『宇治拾遺物語』では二つの話を組み合わせて配列することにこだわっており、この「頼時ガ胡人見タル事」が「これも今は昔」ではじまっていることでも明らかなように、その前にある「清見原天皇、大友皇子と合戦の事」と組み合わせて読むべきものである。いずれも、政治の主導権争いの背景にあった興味深い話を記述したもので、その描き方について検討することも重要であるが、ここではあくまで、テキスト内部の記述が何を示しているのかについてこだわって考察する。

2. 細部の確認

テキストを引用して、細部を確認する。なお、原文はほとんど読み下し文であるが、一部、漢文のような語順になっており、直接引用においては、そのような部分も読み下している。

<発端>

陸奥国の奥に「夷」という「公」に従わない者がおり、それを陸奥国の守であった源頼義が追討しようとした。そのとき、「頼時其ノ夷ト同心ノ聞エ有テ」と安倍頼時が「夷」と結託しているという噂がたったことが発端であった。このような事態になり、頼時は、これまで「公」に責められて勝った者はおらず、自身に思い当たる節はないが、逃げるしかないと述べ、「此ノ奥ノ方ヨリ、海ノ北ニ^{かすか}幽ニ見渡サル地有ナリ」と言い、北方に逃げることを決意する。かすかに北に見えるということで、「見渡サル地」は北海道しか該当するところはない。なお、『宇治拾遺物語』では頼時を「陸奥の夷」と頼時自身を「夷」としている点が異なっている。

<出航>

頼時は「我レヲ去リ難ク思ハム人」だけで移り住もうと決心し、大船一隻に、「厨^{くりやがわ}河ノ二郎^{きだとう}貞任」（安倍貞任）、「鳥ノ海ノ三郎^{むねとう}宗任」（安倍宗任、貞任の弟）などの子、および郎党・従者・料理人など50名ほどを乗せ、大量の食料とともに出航し、「其ノ見渡サル地ニ行着ニケル」と、何の経緯もなく目的地に着いた。『宇治拾遺物語』では、もっと明確に、「いくばくもはしらぬ程に、見渡しなりければ、渡着きにけり」と、すぐに目的地に着いている。

<大河探検>

しかし着いたところは高い崖が続き、船を泊めるところも見つからなかった。そのうちに、葦原が兩岸に広がっている大河の河口（「湊」）に至り、そこから人にでも会うのではないかと遡って行ったが、底なし沼のようなこの大河で、誰にも会うことなく30日ほどたった。

<胡人発見>

そのころ、大きな地響きが聞こえたので、船を葦原に隠して見ていると、「胡国ノ人ヲ絵ニ書タル姿シタル者ノ様ニ、赤キ物ノ口テ頭ヲ結タル一騎、打出」てきたので、なんだろうと見ていると、数多くの胡人が現われ、河岸に並んで、今まで聞いたことのない言葉を2時間ほど「^{さえずりあい}囀合テ」から、順に河のなかに入って行った。その数「千騎」ほどで、「^{かち}歩ナル者共ヲバ、馬ニ乗タル者共ノ、^{さば}畜ニ引付ケツ、ハゾ渡」っていった。

<馬筏>

これまで30日ほどこの河を遡ってきたが、一か所も瀬はなかった。ここでは歩いて人が渡ったのだから、ここは瀬に違いないと、船の人々は思った。しかし、渡河地点に来てみると、これまでと同じように底知れないほど深く、瀬ではなかった。これは「馬ノ筏ト

云フ事ヲシテ、馬ヲ游ガシテ渡ケル也ケリ。其レニ、歩人共ヲバ、其ノ馬共ニ引キ付ケツ渡シケルヲ、歩渡ト思ケル也ナリ」と判断した。

<帰還>

どこまで遡っても大河は続き、陸は際限もなく、もしこれで万が一事故にでも遭ったら逃げてきた甲斐がないと一行は不安になった。そこで食料が尽きないうちに「本国」に戻ることを決意した。それからしばらくして頼時は死んだ。

<宗任の地理観>

以上の話は、筑紫の人が頼時の子の宗任法師に会って聞いたものだが、そのとき次のような法師の感想も聞いている。胡国というところは、中国よりもずっと北と思っていたが「陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ差合タルニヤ有ラム」と。なお、『宇治拾遺物語』では、ここに対応する、「これも今は昔、胡国といふは、唐よりもはるかに北と聞くを、奥州の地にさしつゞきたるにやあらんとて、宗任法師とて、筑紫にありしが語り侍ける也」とある部分を冒頭に配置している。

3. 大河、そして馬

<発端>と<出航>の記述にあるように、陸奥の地からかすかに見えて、あっさり着いたことが示しているように、到着したところはそんなに遠いところではなく、そこを北海道以外に想定することはできない。しかし、それ以降の記述はそれを裏切るものである。

<大河探検>は、30日も遡っても大きな船を航行させることができるほどその河が深くて長いことを示している。<胡人発見>と<馬筏>は、絵で見たような胡国の人のファッションと、多くの馬を巧みに操り、深い大河を渡すことができるような技能を描いたものである。

まず、この大河が例えば、北海道の石狩川であった可能性はほとんどない。50人も乗った比較的大きな船で、30日も遡れる川は日本には存在しない。また、例え石狩川であったにせよ、人にまったく会わなかったということも考えられない。人の描き方にせよ、絵で見たことのある胡国人としており、おそらくこの一行が見たり、聞いたりしたことのある考古学で言うところの擦文人、このテキスト中にある「夷」とは外見が異なっていたことが明確である。

また、馬に関しても同様に北海道である可能性はほとんどない。『今昔物語集』よりも後世のものになるが、『諏訪大明神絵詞』には「日の本・唐子の二類は、其地外国に連て、形体夜叉のこくとく変化無窮なり。人倫・禽獸・魚肉等を食として、五穀の農料を不知。九訳を重ぬとも語話を通じ（難し脱カ）」という北方地域の人について有名な記述がある。それに続いて、この人々の戦い方とか武器とかについての記述があり、そのなかに「男女共に山壑を經過すと云ども乗馬を用ず。その身の軽き事飛鳥走獸におなじ」とあることは注目できる^{iv}。すなわち馬を使っていないということである。もちろん、糠部の駿馬に代表されるように、現在の東北地域は古代以来、牧が設置され、中央に馬を献上し、かつ現地の豪

族たちは強力な騎馬隊をもった^v。しかしながら、ここで育てられた馬がさらに北方に交易されたとか、逆に北方から牧で育てる馬を供給したというような話は聞かない。

それに対して、ここで描かれている大河が、黒竜江（アムール川）であるとしたら、馬については、より肯定的な背景がある。前九年の役があった11世紀の中ごろ、この東北アジア地域はキタイ族の王朝である遼によって統治されていた。頼時一行が遡った流域が遼の版図内であったかどうかは定かではないが、遼よりも強大な勢力はこの地域には存在していなかった。キタイ族の主要な二大姓である耶律と審密が、それぞれ前者の原意が牡馬、後者のそれが牡牛を意味することに象徴されるように、遊牧系の人々であった^{vi}。したがって、頼時一行が目撃した大規模の馬と人間の集団の渡河というシーンも、これを東北アジアの一角とすることによって、きわめて自然に理解することができる。

以上のように、安倍頼時一行は、〈出航〉までは北海道に着いたかのように見えるが、それ以降の記述は、明らかに黒竜江のような大河を遡ったとしか考えられないような記述になっている。それは最後のところで、胡国が「陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ差合タルニヤ有ラム」という宗任法師の言葉で決定的になる。「夷」の地、すなわち北海道の対岸に「胡国」が位置しているというのである。このテキストの背景にあった「事実」を想定することが許されるとすれば、現在の本州東北地域の人々が、11世紀の中ごろ、大きな船に乗って、現在の黒竜江まで行き、そこからさらに30日間も遡ったということになる。現在の地図でその距離を見て、その遠さに驚かざるを得ない。

宗任法師は、鳥海三郎とも称し、兄の貞任とともに父頼時に従い、源頼義・義家と戦い、1062年（康平5）に降伏し、まず伊予に流され、ついで1067年（治暦3）には大宰府に流されている。その意味において、筑紫の人が話を聞いたとするこの設定は自然である。ただひとつの難点は、はじめに着いたところが北海道としか考えられない描写であるにも関わらず、いきなり舞台が黒竜江になってしまうことである。これも、宗任法師の具体的な経験に基づいた地理的な描写が、その地域について知識のない筑紫の人が聞き取り、脱落したと考えれば、とりあえず（十分ではないが）納得できる。

ところで、この話のなかで、『今昔物語集』では頼時を「夷」に「同心」するものとして、『宇治拾遺物語』では「陸奥の夷」として、それぞれ位置づけている。前者は安倍氏と「夷」に一線を引いているのに対し、後者は同一化しているのである。おそらく、これは東北・北海道を舞台にした前近代の歴史を見るときの誰もがぶつかる難問であろう。どちらの側面もあつたとするのが妥当であろうが、このテキストに関して言えば、次のように考えることができる。

『宇治拾遺物語』は「陸奥の夷」であり、安倍氏を「夷」としていることは疑いない。『今昔物語集』では、たしかに一線を画しており、簡単ではないが、頼時一行が船出してから、まったく「夷」についての記述がないことは気になる。やや強引ではあるが、頼時一行にとって東北・北海道の「夷」はとくに注意をひくような存在ではなく、自分たちの仲間、あるいは手下であつたのではないか。

-
- i 『新日本古典文学大系 37 今昔物語集 五』岩波書店、1996年、461—464頁。
- ii この話については、高橋公明『日本海文化叢書 海域世界の中の日本海沿岸地域』富山県、2001年において簡単に触れたことがあるが、どこに行ったのかということまでは検討していない。
- iii 『新日本古典文学大系 42 宇治拾遺物語・古本説話集』岩波書店、1990年、375—377頁。
- iv 『続群書類従 第参輯下』続群書類従完成会、1933年（1907年）、511—512頁。
- v 入間田宣夫「馬と鉄」『岩波講座日本通史 第7巻 中世1』岩波書店、1993年、297—311頁。
- vi 愛宕松男「遼王朝の成立とその国家構造」『岩波講座 世界歴史9 中世3』岩波書店、1970年、19—40頁。